文 献 紹 介

"Géographie historique des villes d'Europe occidentale (**西ヨーロッパ諸都市の歴史地理**): Actes du colloque tenu les 10, 11 et 12 janvier 1981 à l'Université de Paris-Sorbonne : Tome I-Villes et réseaux urbains ; Etudes réunies par les soins de Paul CLAVAL", Paris, Département de Géographie de l'Université de Paris-Sorbonne (Publications du Département N°. 12), 1984, 200p.

本書は，「西ヨーロッパ諸都市の歴史地理」をテーマとして，1981年1月10日から12日にかけて，パリ・ソルボンヌ大学で開催されたシンポジウムの報告集の第1巻である。シンポジウムの組織・運営および本書の編集を担当した P. Claval の序文によれば，同大学とフランス地理学会歴史地理学部会の共催で行なわれたこのシンポジウムには，西ヨーロッパを中心に8カ国から，地理学，歴史学，建築学などを専門とする研究者75人が参加し，34の報告をめぐって学際的な議論が展開され，その報告集の刊行が待たれていたが，このたび，34の報告中14を「都市と都市網」という副題のもとに収録した第1巻が，パリ・ソルボンヌ大学地理学科の双書の1冊として，上梓された次第である。この他の報告は，いずれ出版される第2巻に収録されるはずである。

本書は2部に分かれ，「西ヨーロッパ都市の特質と多様性」と題された第1部には，広場の存在と欠如を軸として，イスラム都市と西ヨーロッパ都市の社会形態学的な比較分析を行なった de Planhol，都市の名称の語源学的分析を通じて西ヨーロッパ都市の2つの起源，2つの系列を，都市による領域組織の問題とあわせて論じた P. Bonnaud，および，都市形態の構成要素に着目してフランス都市の分類を試みた P. Flatrès の報告が収められている。いずれも，都市の分析を通じて，それを生み出した社会の，あるいは，社会集団の特質を読み取ろうとする試みである。

「集住と都市網の諸形態の進化」と題された第2部には，11の報告が収録されており，ガロロマン時代，中世および近代（16世紀）のフランスの都市網を比較して，14世紀から16世紀にかけて大きな変化がみられることを指摘した P. Claval，北西ヨーロッパ沿岸部の都市網の歴史的分析を通じて都市網の進化の「沿岸型」モデルの可能性を指摘した J.-C. Boyer，歴史資料を用いて19世紀ロレーヌにおける中心地の選択的発展の分析を試みた J.-P. Martin（ただし，収録されたペーパー自体は簡単にすぎる），19・20世紀アルザスの工業都市の地域の中心地としての役割とその限界を指摘した R. Schwab など興味深い報告がある。また，歴史家 B. Lepetit の18世紀フランスにおける都市の階層的序列についての分析は，近代的統計資料のない時代の都市システムの分析の方法を提示したものとして注目に値しよう。他方，G. Bernard の報告は，18世紀フランスの1都市におけるオピタル・ジェネラルとその影響圏の分析という，都市的機能に関するものである。その他にも，イタリアのエミリアにおける都市網および領域システムの関係を歴史的に分析した F. Savi，ポー平野中東部の都市化過程を分析した C. Carozzi と R. Rozzi, Gibbs のモデルに準拠してオランダにおける都市化のサイクルを研究した H. van Ginkel，さらに，「教会町」という興味深い事例を含むスウェーデンの都市と都市化を検討した，M. Cabouret の報告が収録されている。また，イタリアの都市システムの特徴を時代ごとに簡明に指摘した E. Dalmasso の報告は，同国の都市システムの進化を概観するのに便利である。

以上，本書に収められた報告をごく簡単に紹介してきたが，最後に，若干のコメントをつけ加えておきたい。都市の歴史地理学的研究は，フランスでは，むしろ歴史学のほうで活発に行なわれ，レベルの高い業績が積み上げられてきた。都市史をあつかった博士論文や，より集約的な形では G. Duby の監修になる『都市的フランスの歴史』にみられる通りである。したがって，フランスで開かれたこのシンポジウムが歴史学をも含めた学際的交流を実現した意義は大きいと言える。このような交流のなかから，歴史地理学の1つの新しい発展の方向が出てくるのかもしれない。A. Baker がアナル学派へと傾斜をみせているのも，同じように考えているからではないだろうか。個々の報告の興味深い内容はもとより，このような考察へ誘うという点でも本書は注目に値すると言えよう。（礒部啓三）